

白壁の町並み 学生が風を呼ぶ

重伝建選定から40年 丸亀・本島の笠島地区



細い路地に沿って100棟近くの木造家屋が所狭しと並ぶ。黒い襦袢の壁に本瓦、漆喰の白壁——。巡って見ると、過去にタイムスリップしたかのような気持ちになる。

瀬戸内海に浮かぶ本島（香川県丸亀市）の北東部、笠島地区の光景。丸亀、造船や操盤で豊臣秀吉の天下統一を支えた塩竈水車（本拠地）として知られる。中世に城が築かれた笠島地区は、城下町の要素を持つ歴史的な町並みが今も残り、「塩竈大工」と呼ばれた名工たちが手がけた技を見ることができ。



笠島地区は1985年、中世以来の瀬戸内の港町の様子を知ることができるとして、国の重要な伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定された。今年で選定から40年。

国の補助を受け、町並みの保存・活用事業を続けてきた笠島地区は、瀬戸内国際芸術祭などで島を訪れる観光客が足を運ぶスポットにもなっている。ただ、人口減少の波に襲われた同地区は、いま存続の危機にある。

「子どもも頃は、地区内に同級生が10人、いっ

人口激減 存続へ「外部の助けも求め」

当時、島民は3千人を超え、笠島地区には3軒の商店もあった。2日間にわたった地区の秋祭りでは屋台が並び、多くの人がにぎわった。

しかし、島には高校も大きな産業もない。進学や就職を機に島を離れる人が多く、島民は約230人まで減った。

丸亀市には40年前に、重伝建エリアに、31人が暮らしていたが、今は20人ほど、三宅会長は今も、エリア内には空き家も多く、所有者がわからなくなっている家屋もあるという。

幼少期から笠島地区で暮らす70代男性はこの



四国職業能力開発大学の学生らとしゃも縄づくりをする笠島地区の住民＝香川県丸亀市本島町笠島

町並みをいつまで維持できるのだろうか」と不安を口にする。自治会で担ってきた草刈りやごみ拾いの顔ぶれはもう高齢者ばかり。この男性はその中でも若い方だという。

こうした状況の笠島地区に3年前から、学生が通っている。技術者を育成する四国職業能力開発大学校（丸亀市）の村井花子講師（建築意匠設計、まちづくり）のゼミ生たちだ。

NPO法人「香川歴史的建造物保存活用会議」が開く勉強会で三宅会長と出会うのをきっかけに、村井講師は卒業研究に取り組み学生を笠島地区に連れて行くようになった。

町並みの価値や地区の課題などをまとめた初年

は「若い人が来ると、皆が外に出てきつかけになる」と喜ぶ。

村井講師は「学生がイベントをすることで、島外の人にも参加しやすい。移住につながったり、島を出た人が再び関心を持ったるきつかけになればいい」と話す。

今年11月、笠島地区の重伝建選定40周年記念シンポジウムが市内であった。登壇した三宅会長は「建てられた当時のままの状態を残しているのが笠島の最大の価値。暮らしてきながら、外部の助けも求めたい」と話し

度の研究発表の際、ある学生が「地域の人とお話するイベントを」と提案した。確かに地区を歩いているも、住民と接する機会には乏しかった。

村井講師は翌春、住民らの会合で餅つきに誘った。すると、住民らは「餅つきするんだら太鼓台を出そう」と、話した。島にふんふん、気づけば「お祭り再現プロジェクト」になっていた。

その年の11月、同会議主催で、長生倉庫に呼ばれた太鼓台を住民・学生が一緒に組み立て、餅つきとともに楽しんだ。それ以降も、虫送りやしゃも縄作りなど、季節行事イベントとして次々と再

現してきた。住民の男性は「若い人が来ると、皆が外に出てきつかけになる」と喜ぶ。

村井講師は「学生がイベントをすることで、島外の人にも参加しやすい。移住につながったり、島を出た人が再び関心を持ったるきつかけになればいい」と話す。

今年11月、笠島地区の重伝建選定40周年記念シンポジウムが市内であった。登壇した三宅会長は「建てられた当時のままの状態を残しているのが笠島の最大の価値。暮らしてきながら、外部の助けも求めたい」と話し

た。（大野隆宏）